

イメージを越えて

関西学院大学1回 本田彩葉

ネパール、ときいて何を思い浮かべるだろうか。

私は高校1年生のとき、学校主催のスタディツアーを通して初めてネパールを訪れた。周りの子たちとは違う経験がしたいと参加したこのツアーは、私が国際協力に足を踏み入れる第一歩となった。

ネパール、ときいてまず頭に思い浮かんだのは環境問題である。ゴミ処理の設備が整っていないため道路に山積みされた大量のゴミや、交通整備が整っていないために起こる大気汚染の問題が開発途上国のイメージとしてあった。実際にネパールのトリブバン空港に到着したとき、まず目についたのは電信柱に絡まった電線である。そしてそのすぐ傍には大量のゴミが山積みされていた。「これが開発途上国か。」「日本の整備された綺麗な道路に感謝しなくてはな。」と、思った。しかし、空港があるカトマンズからバスで10時間ほど離れたドダウリ村に到着したとき、その風景は一変した。電信柱に絡まった電線が見当たらないどころか、道路にはゴミ1つさえ見当たらなかった。菜の花が一面に咲き、空気もおいしかった。私はこのドダウリ村で2日間のホームステイをさせて頂いたのだが、中でも最も驚いたことは、村のほとんどゴミを出さない生活サイクルである。トイレトペーパーは使わず水で洗い流し、自宅で育てた穀物や鶏は必要な分だけ調理し残さず食べていた。メディアを通してだけではわからないネパールの現実を目の当たりにした瞬間だった。開発途上国の一国として、ネパールには金銭的な面でも物を大切にせざるを得ない現状があったのだろう。しかし、そこには日本人が忘れかけていた物を大切にする心が隠れていたのだ。振り返ってみると、都市部でもネパールの人々は企業の広告が載っていないレジ袋を使いまわすなど、無駄な消費をなくすために工夫していた。

帰国後、私はネパールのことを振り返りながら日本の生活に客観的な目を向けてみた。海外の人が持つ日本のイメージは、とにかく「綺麗だ」ということである。確かに日本の町中には人口で植えられた木が茂り、道路の真ん中には綺麗な花が咲いている。環境を大切にしながら発展を遂げてきたイメージがある。しかし、そのイメージは本当に正しいのだろうか。その疑問を突き止めたとき、途上国よりも深刻な問題がいくつか隠れていることに気がついた。特に、私が深刻だと感じたのは日本のゴミ問題である。私の家から近所の海に行く途中、大量の家電が川に捨てられているのを目にしたことがある。扇風機や自転車なども捨てられており、どれもまだ使えるような物ばかりだった。物を大切にするネパールではありえない光景であろう。日本ではゴミ処理の設備が整っているため、目にするゴミの量は少ない。しかし、物が少ない代わりに1つ1つの物を大切にするネパールに比べ、

テーマ 国際協力に興味をもった「あの時、あの瞬間」

大量生産大量消費型社会の日本が出すゴミの量ははるかに多いのだと気づいた。

このように私はネパールスタディツアーをきっかけに、イメージを越えて本当の問題とは何かを考えることができるようになった。と、同時に今まで気づけなかった身近な問題にも気づくようになった。国際協力とは単に海外「支援」を意味するのではない。世界市民として他者と共有している身近な問題解決に取り組むことも国際「協力」であると感じる。帰国後は、気づいた身近な問題に対して自分にできる活動を続けてきた。高校時代は、まだ使えるものは使い、買い物をする前に本当に必要かよく考えてから購入する。といったことに加えて、地域の海岸清掃活動を積極的に続けた。身近な問題に目を向けることで、次第に本当の問題を見極める力が身についてきた。現在は大学でE S Dボランティアというサークルを立ち上げ、仲間と共にマイ箸などのエコ活動を広める運動を行っている。ドダウリ村での二日間を原点とし、外の世界に触れることで気づく身近な問題解決に今後も積極的に取り組んでいきたい。